

遠藤周作

真昼の悪魔



ま ひる あく ま
真 昼 の 悪 魔

新潮文庫

え-1-20



昭和五十九年十二月二十日 発行
昭和六十年六月五日 四刷

著 者 遠 藤 周 作
えん とう しゅう さき

発 行 者 佐 藤 亮 一
さ とう りやう いち

発 行 所 株式 新 潮 社
かいしゃ しんしやう しゃ

郵便 番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)二六六一五一一
編集部(〇三)二六六一五四四〇

振替 東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛て送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

Ⓐ 印刷・大日本印刷株式会社 製本・憲專堂製本株式会社

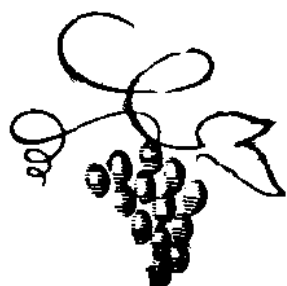
© Shūsaku Endō 1980 Printed in Japan

ISBN4-10-112320-9 C0193

新 潮 文 庫

真 昼 の 悪 魔

遠 藤 周 作 著



新 潮 社 版

3326

真昼の悪魔

プロローグ

少し寒いが、よく晴れた日曜日だった。

四谷の上智大学にそった土手道で子供たちが声をあげて走っていた。子供たちはそばの聖イグナチオ教会のミサに来たのだが、九時のミサが終って親たちが神父と外で雑談をしている間、土手で遊んでいるのである。

九時のミサのあと十時のミサが行われている最中である。

ひろい教会では外国人の信者もかなり交って隙間のないほどぎっしり詰っている。ちょうど、福音書の朗読が終って、説教がはじまるところで祈禱^{きとう}席のあちこちで咳^せきこむ音や鼻をすする音が聞えてくる。

「今日は」

白髪の柔和な顔をもった外人神父が信者を祝福してから話をはじめた。

「悪魔の話をしたいと思います」

うつむいていた信者たちはびっくりしたようにこの神父に顔をあげた。普通ミサでこんな悪魔の話など滅多にすることはないからだ。

だがこの外人神父は上智大学の聖職者のなかでもすぐれた哲学者として有名な人だった。彼の書いた『聖トマストマスの存在論』や『スコラ哲学概論』は日本の学界でも高く評価されている。

「皆さまのなかで『エクソシスト』という小説をお読みになった人もいらっしやるでしょう。あれは映画にもなりましたから映画を御覧になった方もおられるかもしれません」

手を前にくみあわせて、おだやかな微笑を皆に送りながら神父は流暢な日本語で話をつづけた。

「それは一人の小さな娘に——無邪気で悪も知らなかった少女にある日、悪霊がとり憑いた話です。少女はその日からまったく別の怖ろしい人格になり、口にすることもできぬような行動をしはじめます。彼女の母親は精神医に相談し、神父に助けを乞い、その少女から悪霊を追い出すため、凄惨な努力を致します。『エクソシスト』はその努力の話です。

そんな馬鹿げたことなど信じられぬと皆さんはおっしゃるでしょう。そんなものはアメリカの小説家がつくった作り話だと思いいになるでしょう。

ところがこの小説がモデルにした出来事が実際に米国であったのです。実際の事件と小説とが違っているのはただ一つ、悪霊がとり憑いたのは小説では少女ですが、実際の事件では一人の少年だったということだけです。

しかも、その事件にたちあつた神父は——実は私の伯父でした」

この最後の言葉に祈禱席を埋めた信者たちは一瞬、水をうったように静まりかえった。神

父は自分の話がみんなの心を惹きつけたのを感じて、嬉しそうにまた微笑をうかべた。

「少年に果して悪霊がとり憑いたのか。それとも、それは一時的な極度の精神錯乱にすぎなかったのか、——実際の事件に立ちあわなかった私にはわかりません。しかし私個人としては、むしろこの事件は悪魔とは別に関係のない精神錯乱によるものだと考えています。なぜなら悪魔というのは——普通みなが間違つて考えているように人間を狂人にさせたり、奇怪な行動に走らせたりは滅多にしないからです」

彼はそう言つて両手の指をくみあわせ、

「悪魔というとは西洋では子供までが耳の長いあごの尖つた絵を思ひうかべます。あるいは手足の爪のびた鼠のような怪物を想像します。どれもこれもが人間をぞつとさせるような醜い、いやらしい姿をしています。でも悪魔とはそんな滑稽な、あるいは我々が尻ごみをするようなものではないのです。悪魔は自分が悪魔だと訴えるような姿を少しも持つてはいません」

教会の外では午後からこゝで行われる結婚式のために礼服を着た若い青年たちがもう受附の机を運んでいる。四谷の駅では日曜日のせいで平日より降車客の人数は少ないが、それでも家族づれや恋人たちが次々と改札口を通りすぎていった。

このあかるい陽ざしの風景を見まわしても悪魔のことなど、まったく考えられもしない。実感も現実感もない。ここは第一、日本なのである。

だが聖イグナチオ教会のなかだけは、神父の巧みな話術のため、信者はひきこまれたよう

に耳かたむけていた。

「では悪魔がいるとすれば、彼はどんな姿をしているのでしょうか。どんな風にあらわれるのでしょうか。上半身は人間で下半身は獣のような恰好で出てくるのでしょうか」

誰かがくすくすと笑った。神父もその笑い声のした方角に笑顔をむけて、

「今、どなたかがお笑いになりました。お笑いになったのは無理ありません。私の話がありまに馬鹿々々しいからです。悪魔なんて殊更に持ち出したのが愚劣だからです。だが皆さん」

老神父はここで一段と声を大きくした。

「それが――悪魔の狙いなのです。悪魔とは皆さんに自分が馬鹿々々しい想像の産物だと思われたがっています。悪魔なんて実在しない、愚劣なオカルト映画の主人公だと皆さんが考えることを望んでいます。そしてそういう心のなかに悪魔は目だたぬ埃ほこりのようにそつと忍びこむのです。」

そう。悪魔は埃に似ています。部屋のなかの埃には私たちはよほど注意しないと絶対に気がつきません。埃は目だたず、わからぬように部屋に溜たまっていきます。目だたず、わからぬように……目だたず、わからぬように……。悪魔もまたそうです。

アンドレ・ジイドという仏蘭西フランスの小説家がうまいことを申しました。悪魔の最大の詭計きけいは自分が存在しないように人間に思わせることだ……と」

誰かが抑えていた咳をした。若い女性である。彼女はハンドバッグからハンカチを出して

唇にそつと当てた。香水の匂いがほのかに漂った。

ミサが終ると祈禱席から立ちあがった信者たちはぞろぞろと外に出た。出口で日本人神父が皆と挨拶をとりかわしている。

彼女は笑顔をみせて知りあいの婦人たちと話をしていた。

「わたくしたち、これから『奇跡』という映画をみるのよ。とっても素晴らしいんですけど」

「どこの映画？」

「フィンランドだったかな。一般上映はされないけど、みた人は皆、感動しているわ。一緒にいらっしやらない」

「ごめんなさい。今日は駄目」

「また病院？」

「ええ」

彼女がたち去ると残った婦人の一人が友だちにたずねた。

「どなた？ あのかた」

「お医者さま。若い女医さん」

「奇麗な人ね」

若い女医はそれから二十分後、ホテル・ニューオータニの広いティールームで紅茶を飲んでゐた。眼の前のひろい窓から水の流れる日本庭園がみえた。外人客たちが二、三人、橋の上で写真を撮っている。

彼女はさっきの神父の話を思いだしてゐた。悪魔の話。しかし彼女は神に実感を持たないように悪魔にも現実感を感じられなかった。

教会にはこれで一年かよつたが、どうも溶けこめない。もともと教会に出かけたのは自分の心に巣くう何とも言えぬ空虚感のためである。信仰でも持てばこの空虚感と白けた気持は癒なやされるかと思つたが、それも駄目だった。

この白けた空虚感はまだ中学生だった頃からずっと続いている。高校の時も女子医大の学生になつても決して消えない。学生時代、勉強は優秀な成績をとつたが、勉強も研究もぼつくりと穴のあいたようなこの胸を充たしてくれなかった。恋愛の真似事も三、四回したが、それに酔えたことは一度もない。

誰も彼女のそんな心を知らない。彼女もまた教授や研究室の仲間になんか自分の素顔は絶対に見せないからである。二つの顔をいつも使いわけて毎日を送つてきた。

紅茶を飲みながら彼女はさっきから、斜め右の席で一人の中年の男が自分をそつと盗み見ているのに気がついてゐた。こちらが眼をむけると、向うはあわてて顔をそらせた。

(そのうち、声をかけてくるだろう)

今までの何百回という経験でよくわかる。ハンドバッグから煙草を出して男を誘うように

ゆっくりと吸った。

予想していた通り男がまるで彼女の紫煙に吸いこまれたように立ちあがり、

「あの……」

テーブルのそばに来て、照れたような顔して、

「お一人ですか」

口臭のように関西弁のアクセントがその言いかたにまじっている。神戸か大阪から出張で上京してきた会社員にちがいない。こっちがわざと怪訝^{けげん}そうな表情をして、

「ええ」

とうなずくと、図にのって、

「およろしかったら、一緒に食事、しませんか」

微笑^{ほほえ}みながら女医は相手を傷つけないように断った。男はがっかりしたようにうなずいてカウンターの方に去っていった。

面倒臭いから断ったまでである。一緒に食事をして向うが次に望むものが何であるかはわかってゐる。彼女には向うの望み通りに彼が泊っている部屋に行っても別にかまわなかった。みだらなこと、不道德なことをしたとはまったく思わない。ただ、そんな行為にはこの白けた気持を充たすだけの悪の快感が伴わないのだ。

二カ月前もこのホテル・ニューオータニの廊下でやはり一人の青年に誘われたことがあった。

「条件があるけど……よくって」

と彼女は微笑みながらその青年に話しかけた。

「条件って。お金？」

「いいえ。部屋に入ったらひとつだけ、言うことをきいて頂きたいの」

二人はエレベーターで旧館の六階までのぼった。エレベーターをおりる時、その青年はまわりの客に恥ずかしいのか、一人で先に出て、廊下をすたすたと歩いていった。

部屋に入ると男は、

「条件って？」

ともう一度たずねたが、彼女は笑ってバスルームに入った。

鏡のうしろ側にコップなどを入れる棚があつて、そこに針やボタンを入れた小さなセロフアンの袋がある。

その袋を破って針を出した。

バスルームを出ると青年はちょうど、ホテル備えつけの浴衣に着がえているところだった。彼の持ってきた黒い靴かばんの口がきたならしくあいて、そこによごれた靴下がつつこんであった。

「ひとつだけ、言うことをきいてくださるわね」

「いいよ」

青年は浴衣の胸をあわせながら簡単に応じた。

「掌をその机の上にのせて」

「こうかね。何をするの」

彼女は五本の指を大きく広げた手の甲に縫針を突き立てた。悲鳴をあげて青年が飛びあがった。

「何をする」

「かして。取ってあげますから」

女医である彼女は針の突きさしかたはうまかった。黒い血が胡麻ごまつぶほど吹き出ているだけだった。

約束の通り、青年に体を任せた。だが悪いことをしているという快感は一向に起きなかった。愚劣な馬鹿々々しい時間つぶしだった。白々とした気持で彼女はその部屋を出た……。

(悪って何かしら、何が悪なのかしら)

その日もいつもと同じような疑問を彼女は思った。それは高校生だった頃から、いつも心に浮ぶ疑問だった。

悪とは一体、なんだろう。世間で言う悪。たとえば何かを盗む。人をだます。それは相手には迷惑をかけるだろうが、それ以上の何ものでもない。悪というようなものではない。人を殺す。しかし人を殺すのはほとんど貧しさや憎しみや欲望が伴っている。それ相応の理由がある。それ相応の理由があつて人を殺すことが悪だとはとても思えない。また人を殺してはいけないと言うのは社会の秩序を保つため、たがいの身の安全を保証しあうための約束事にすぎないから、これを破っても良心をえぐるような辛さを感じるとはとても思えない。む

しる犯行が発覚しないか、発見されないかという不安や怖れのほうが人間には強いのだ。ましてたかがホテルで行きずりの男と寝ることが悪だの破廉恥だのとどうしても思えない。なぜいけないのか、さっぱり、わからない。

だが、さきほど中年の男が誘ってきた時、彼女は微笑しながら断った。そんなことをしても、この白けた虚ろな胸の穴が充たされないのを知っていたからである。

日曜日の病院はがらんとしている。

いつもは混雑している玄関のあたりも薬局待合室も外来患者がずらりと腰かけている長い廊下も人影はひとつもない。玄関前の駐車場も虚ろである。

緊急患者を入れる入口から彼女はクレゾールの臭いのこもった階段をのぼった。そしてストレッチャーや病室の食事運搬車をのせる広いエレベーターを使って病棟の四階でおきた。午後の病棟は安静時間で静まりかえっている。

「今日は」

看護婦室を覗いて当番の二人の看護婦に声をかけ、

「異常はありません？」

「ああ、先生」

看護婦の一人がカルテから顔をあげて、

「四一八号室の柴崎さんが熱発ねつぱつですけど」

「ネブライザーはやりましたの」

「ええ、もう終りました」

うなずいて診察着を着ると聴診器ステトを持って彼女は大部屋に出かけた。柴崎という年よりは顔をあかくして眠っている。

「熱が少し出たようね」

うす眼をあけた患者に彼女はいたわるように笑いかけ、

「まだ少し気管支に血が残っている時は熱が出ますけれどね。大丈夫だから安心なさい」
やさしく説明した。聴診器を胸にあてて、

「ラッセルもあまり聴えないようよ」

そう言つて毛布をかけなおして大部屋から出ていった。その姿が消えると、

「柴崎さんはええぞ」

隣りのベッドの患者が老人に声をかけた。

「あんなべっぴんのやさしい先生が主治医だからな。俺など、男の医者に受持たれて、診察されてもさっぱり楽しくもないぜ」

女医は看護婦室に戻つて解熱薬しよほうせんの処方箋を書いてから五階の隅にある自分たちの研究室に行つた。

陽にやけたカーテンの間から午後の光が研究報告や専門書の雑然と並んだ書棚にあたつて